

ライフスタイル・生活等に関する関係文献

1. 月尾嘉男『縮小文明の展望』東京大学出版会

「過去数百年間にわたり、産業革命を背景にした近代社会は効率という概念を金科玉条として運営されてきた。それは出発の時点では社会に適合していたとしても、あらゆる側面に浸透してくると『モダン・タイムス』が象徴する不幸の原因となる。これからの百年単位の社会を検討するとき、効率という概念から脱却し、次代の指導理念として適切な概念を発見することが要求されているのである」

「画一な尺度では、総量が増大しないかぎり幸福は到来しなかったが、多様な尺度を導入した途端に縮小しても幸福は獲得できるようになる」(7・4・2多様尺度)

「情報科学の世界にエントロピーという概念がある。物理科学からの転用であるが、ある世界で情報が多様であるほどエントロピーは減少し、一様であるほど増大するという指標であり、すべてが完全に同様になったときにエントロピーは最大になり、活動が停止するという概念である。一般に放置しておけばエントロピーは増大する方向に進行し、それを低下させるためには努力が必要とされる」

同氏+百年の転換戦略研究会『日本の転換戦略』講談社

「多様性を重視する価値観への転換」

「多様な尺度を社会の中に投入することによって、それぞれの尺度で、地域、企業、個人というものを多様に評価する社会を実現していこうというのです」

「異質であることを本質とする『情報』を中核とする社会が、今後、一〇〇年単位で展開していくと考えれば、多様な尺度を社会に取り込んでいくことの重要性が理解できると思います」

2. 川勝平太「江戸社会を世界大の視点で見直すとき ニッポン型生活世界の再生」現代農業増刊(1996年)

「まずもろともに気宇壮大な構想力を発揮し、地球は小さく限りある世界だという認識のもとに世界観を構想すべきであろう。限りある鎖国世界というアナロジーで地球をとらえることができる。われわれは限りある世界の中での生活経験を、近世江戸社会に一度経験した。(中略)遺産の掘り起こしと活性化に希望をつなげるものである」

同『富国有徳論』紀伊國屋書店

「交流は共通性とともにより質性をも際立たせるからです。違いの自覚は、生活の基盤としての郷土への愛着をうみます。そのことは、それぞれの身近にある自然風物や伝統の再発見に導くでしょう」

「競争のありかたも変化しました。『物の豊かさ』を競う生産優先の時代には価格競争が問題でした。これからの多民族共存時代は、価格のみならず、文化的価値が問われることになり、価値競争という『心の豊かさ』にかなうものを創出できるかどうか、まさに文化的資質が試されるのです。物心ともに豊かな『富国有徳の士民』として、日本人が自国の景観や文物に自信をもち、世界諸民族から憧れと尊敬をかちうることが二十一世紀の日本文明の課題であると考えます」

3. 山口昌男「遊びと文化と経済（やさしい経済学）」日本経済新聞（2005. 5. 13～5. 24）

「二十世紀の資本主義は技術革新による経済成長を至上命題としてきたが、そのなかで文化は常に計量化されないもの、いかがわしいものとして排除される傾向があった。ところがそうした文化にこそ、これからの経済をけん引する価値が埋め込まれていることに人々がようやく気づき始めたのが現在ではなかろうか。従来の経済成長主義が見落としてきた文化、さらに根本的な人間の原理のようなものを見直しが求められている」

「二十一世紀の国家戦略の基本は国家の軍事力でも財務・経済力でもなく、国家の『魅力』をどうデザインするかだという議論も始まっている。これまでの市場経済の『外部』とされてきた文化が大きくクローズアップされてきている」

4. 吉田和男「人口減少と制度改革（やさしい経済学）」日本経済新聞

「いわゆる文化が人々の生活の中でより大きな価値を持つことになる。（中略）今日の社会は、物質の大量消費を豊かさとする考え方から、文化・芸術や、人と人とのつながりのなかで豊かさを享受することを『豊かさ』の基準とする考え方に軸足を移し始めている。（中略）文化を支える仕組みは基本的に民間での制度であり、その制度づくりが、二十一世紀の課題となる」

5. スタンフォード日本センター「産業文化力が拓く（やさしい経済学）」日本経済新聞

「まさに、ヘレニズムのように、多様な要素が折り重なって産業文化を形成している。世界はいま、グローバルなネットワークを形成しつつあるが、そこで重要な論点は、ローカルな生活世界での文化行動がネットワーク連鎖の複合性を生みだし、それが世界の人々との間の『関係性』を組み替えているということである。この視点に基づき世界の人々との

関係性を深めていくことが、二十一世紀日本の生きる道である」

6. 木村良樹（和歌山県知事）『『緑の雇用』が森林保全・雇用創出・地域活性化の一石三鳥を可能にする』文芸春秋編『日本の論点2004』

「心の所得」

「森林の整備に携わっていることで、地球環境に貢献しているという誇り、自然に囲まれて生活することで得られる精神的なやすらぎ、人間関係が希薄な都市での生活に比べ、地域にとけ込み周囲から頼りにされる存在としての喜び。こういった充実感を『心の所得』と呼んでいる。二一世紀の成熟した社会では、金銭の多寡よりも、このような価値観が求められている（筆者注）」

7. 杉本大一郎『エントロピー入門』中公新書

「ふつうの経済学でも、このように多様性のある『価値』という概念を、あらゆる側面から分析し、定量化しているわけではない。むしろ、それはお金によって表現されるものとして捉えられている。（中略）しかもそれらのことは、地方や社会によっていろいろ異なる。肉や石油を多く産出する国ではその価値は低く、不足している国ではその価値は高い。こうして、経済学でいう価値は、人や社会との関係によって決まるものであり、物理学で扱う概念のように客観性を持つものではない。それは、経済学が人や社会やお金の動きを扱うものだから、当然のことだとも言える」

8. 日経広告研究所編『「多価値化」社会 豊かな時代の＜幸せ＞探し』日本経済新聞社
生活の再発見—木村尚三郎

「多様化に応える湯治場的発想」

「現代人の欲求は実に多彩です。（中略）現代人が求めている最高の“仕掛け”、それはまさにこの湯治場です。健康になる。生活を楽しむ。しかも、頭がよくなる。こうした湯治場を作ること、あるいは湯治場的発想が、これから先、幾重にも多重化、多様化していく人々の志向をとらえ、欲求を満たすカギになるのではないのでしょうか」

9. 養老孟司「超伝導リニアは、日本の技術力と国土の安全性を考える上で重要な意味をもつ」WEDGE（2005. 7）

○ 不可欠な「国土の安全性」の視点と豊かさのあかし

「私が研究している生物の世界でも、あっちがだめなら、こっちがあるというように生

きていくためのバックアップがかかっているのですからね。(中略)つまり、多様性があることは選択の幅が広がり自由でもあるのです。そして、選べるということは豊かさにつながるのです」

○ 大きな視点から「ニーズ」という穴を埋める

「何か新しい分野を開拓していくというのは、平坦な社会に山を作るのではなく、社会に空いている穴、つまり社会が必要とするニーズを埋めることだと思うのです。普通の人には見えない穴を大きな視野から上手に見つけ、そしてそれを埋めることで社会が平坦になり安定が生まれるわけです」